



新 毎 日 新 聞

1月8日(月)
2015年(平成27年)

発行所：東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-0051 電話(03)3212-0321
毎日新聞東京本社

小学生時の夢かなう

都心のマンションの一室で、宇宙開発の要となる電子回路の開発から設計・製造まで行っていたと聞いて信じられる人はどれくらいいるだろう。ファースト電子開発(本社・北区上十条)の板橋区清水町の事業所はまさにそれだ。社員4人。社長の伊藤義雄さん(73)は、日本の無線技術の第一人者の一人だ。

【近藤浩之】

マンションの一室 通信回路開発

もともと宇宙少年だった。小学4年の時、祖父に連れられて見た映画「宇宙探検もの。以来、宇宙に非常に興味を持つようになった。ボール紙を丸め、虫眼鏡のレンズで手製の天体望遠鏡を作った。「大学に入り、家庭教師のアルバイトでやっと望遠鏡を買った時はうれしかった」

宇宙に関わる仕事が夢だったが、当時の日本には、また宇宙産業は育っていなかった。アマチュア無線が趣味で、高校時代に無線機を自作、大学

も電子工学専攻だったの線を使い、スタート信号を1000分の1秒以内の誤差でゴール地点に伝える競技スキームの計画システムは、海外メーカーにOEM供給し、世界シェア7割に及ぶ。さまざまな競技の五輪予選でも世界標準という。



東京発 宇宙への旅

5

開発対象は多岐にわたる。社員が手に持つのは、木の伐採中の事故を避けるため、林業従事者同士が互いに近づきすぎると警報音を鳴らす装置

伊藤社長「基礎が大事」



マンションの一室に所狭しと機器が並び、手前が伊藤さん。外出中の1人を加えれば会社員は板橋区清水町で

そんな伊藤さんに、宇宙の依頼があったのは2003年。若手職員の育成を兼ねて切り離す

◇(空研究開発機構)から仕

成などを目的にした小型衛星「マイクロサット」の通信回路の開発を頼まれたのだ。母衛星の宙中に宇宙で切り離す四つの子衛星を載せた構造。母衛星が軌道に乗った後、母子間で「健康状態」を話し合い、タイミングを見て切り離す

「母衛星が軌道に乗った後、母子間で「健康状態」を話し合い、タイミングを見て切り離す

状態」を話し合い、タイミングを見て切り離す

短波は電離層ではね返されるので、宇宙の衛星同士の間で使えば地上から妨害が入らない」と説明する。

機材充足後の方針変更で開発は中断し、伊藤さんの技術が宇宙で花開くことにはなかったが、「仕事の依頼がきた時は、幼い頃から夢がかなう、やっとなんか仕事ができると、それはうれしかった」と、にこやかに振り返った。

その後、東大阪の中小企業が作った「まいど1号」など、09年1月に打ち上げられた公募小型衛星6機のうちの1基「かがやき」でも通信システム開発を担当した。今も大学などから、無線の知識を生かして宇宙開発を手伝ってほしいと依頼されるが、残念ながら「ボランティアで、というものが多く、きりがないので関わっていない」という。

伊藤さんは「ほとんどの方は、宇宙技術は最先端技術だと思ってる。例えは、それは違う。例えばあるが、基本的には地上で十分試され、安定した部品や既存技術の集合体なのです。短波帯を使うのも基礎技術」。そして、将来を危惧する。

「その基礎を幅広く持つ人が、今の日本ではとても減っているのです」



2009年1月の打ち上げを前に公開された4機の公募小型衛星。手前中央が「かがやき」。09年12月、東大阪市で、内林洋輝撮影